

原風景に関する調査的研究

—青年の自己確立との関係を中心に—

木内 淳子

人は時に自らの原点を模索する。そして、初めて何かに触れたときの感動や興奮、緊張、歓び、畏れ、反省など、確かにそこに自己というものが感じられた原点の記憶を、手繰り寄せることを試みる。また時に「ここではないどこか」に身を置くことを願う。「どこか」とはいえ、それは既に心に決められている場所であり、やはり「自分の帰るべき場所」のような、親しみ深い場所であり、記憶の底からの吸引力によって導かれる俥に、求め欲する場所なのだろう。そこには「私」のアイデンティティの土台があると言えないだろうか。「私は何者か」、この切実な問いかけに応えてくれる何かが、「原風景」にはあるのではないかと筆者は考えた。

本研究では「原風景」の定義を「過去の経験ではあるが、心に強く残っており、しかもそれは単なる過去の経験ではなく、現在と未来の自分にとって何らかの支えになっている、忘れられない風景、影響を与える風景」(呉・南1998)とし、質問紙法を用いて自らの原風景への関与の程度と自己確立との関係を検討した。まず自らの原風景はどのような意味合いを持ち、それと自分自身とはどの程度の繋がりを持っていると感じているか、これを探る「原風景への関与尺度」を作成した。次に自我同一性尺度(Dignan 1965, 三枚 1998)と自尊感情尺度(山本ら1982, 山本 2001)を併せたものを「自己確立尺度」として再構成し、前述の尺度との関連を検討した。加えて2尺度の関係性を探る一助とするため、「原風景イメージ」をSD法で測定し、合せて検討した。対象者は青年期男女(平均年齢20.9歳)である。

その結果、原風景は「よろこび」と「安息感」を同時に併せ持ったイメージとして想い描かれるものであり、自分と原風景との情緒的で強い繋がりを感じる者は、同時にそこに自らの原点を見出し、それが心の支えとなっていることが明らかになった。また自己確立尺度は「自己肯定感」、「目的志向性」、「自己確信性」の3因子から成り、「自己肯定感」と「目的志向性」の高い者は、原風景への関与度が強いことが明らかになった。「自己確信性」については有意な関係は認められなかったが、自己確立尺度の3因子はそれぞれに正の相関が認められたため、「自己確信性」も原風景への関与程度と全く関係がないとは言えないものと思われる。以上のことから、原風景のイメージを明確に持ち、それと自分との情緒的な繋がりを強く感じている者は、「私は他の誰でもない私自身である」と思い、そのような自分をありのままに認め、自らの方向性に展望を持っているということが示唆された。

原風景には極めて個人的な内容が含まれている。自らの原風景を身近に描き感ずること、そしてその風景と共に生きていくことが自己確立の一要素なのだとすれば、心理臨床場面、特に個人の時間軸を取り扱うような心理面接場面においては、原風景はクライアントによって何らかの形で語られ、触れられてゆくことになる、重要なテーマだと言えることができるのだろう。